

「召命」

主任司祭 晴佐久昌英

このたび、小池亮太助祭と豊島治助祭両名が司祭に叙階された。ぼくは青年時代からの二人をよく知っている友人として、また試練の研修期を支えてきた養成担出司祭として、そして二人の司祭叙階を祈り続けてきた高円寺教会の主任司祭として、三重の喜びを感じている。

今回の叙階式では、受階者を呼び出す「呼び出し」という役を仰せつかったが、あんなに誇らしい気持ちはなかった。「司祭に叙階される人は前に出てください」と二人を呼び出したとき、本当に神様のお仕事をお手伝いしているという実感があつた。そうして自らの名前を呼ばれ、「はい」と答えてまっすぐに祭壇の前へ進み出た二人の顔は、まさにイエスから「私についてきなさい」と呼び出された弟子の顔だった。

神が、人を呼び出す。これを「召命」と言う。この召命にはいろいろな種類があるが、司祭職はまさに召命であり、召命でなければ意味がない。これは、たとえば入学や就職などとは本質的に違う。学問や仕事は自分で選び、自分で決心して進む道である。だから、別の道を選び、別の決心をしても何の問題もない。自分でしていることなのだから自分の責任である。

しかし、召命は違う。自分で選んだり決めたりする世界とは次元が違う。呼びだされた者に、もはや選択の余地はない。呼び出したのは神だからだ。神が召し、神が命ずる召命に、人間がどうして逆らえようか。たぶん「自分に向けた仕事」だの「自分を生かせる道」だのと、基準はすべて自分という現代人には理解不能だろう。だが実は、この召命こそが人間存在の根源的ありようであり、この召命が世界を支えている。

司祭職をはじめ、自らの召命について考えている人がいるならば、はっきり言っておきたい。もし、他の選択肢があつて迷うようなら、おやめなさい。それは召命ではない。召命という分野では、人間の選択など神は必要としていない。向き不向きなども一切関係ない。神はただ、「はい」と答える人をお使いになるだけである。

しかし、ひとたび「はい」と答えるならば、もはや何の心配もない。あとは神の責任であり神が働く。あなたは世界を救うことができる。